

令和元年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「 被災した私が思うこと 」

広島県 東広島市立板城小学校 6年 ^{ながたに}永谷 ^{こころ}心絆

田んぼが大きな川のように連なり、道には雨水やどろがたまり、地区が真っ茶色な大きな水たまりのようになっていた七夕の日の景色を私は今でも覚えています。

私の住む地域は昨年のごう雨で被害を受けました。雨がふり続いていた7月6日の夜、いつも通り家族で夕ごはんを食べていたら、突然両親のけいたい音がしました。その異様な音に何事かとおどろき、それから私はごはんが進まず、不安で心がしめつけられていました。私の家がハザードマップの黄色のエリアにあることは知っていたし、特別警報が出たらひなんすることを家族で決めていたので黄色のエリアからはずれたおじいちゃん家へひなんしました。七夕の朝、前の山がくずれたそうです。校区内でも災害が起きて消防団からお父さんに招集がかかり、お母さんはお父さんを家までつれて帰りました。直後にゴゴゴという地ひびきのような音が私の耳に入りました。おばあちゃんが外に出て確認し私も一番奥の部屋に行って山を確認しました。すると、うらの山がそこから辺にあるたくさんのものを巻きこんで家に向かってきていました。私はパニックになりました。何をどうすればよいのか分からなくなりました。おばあちゃんももどってきて2階へ逃げようとした時、うらの部屋のまどが割れた音がしました。無我夢中で外へ逃げました。ちょうどお父さんを送って帰ってきたお母さんの車へ乗りこみました。私たち姉弟は車に乗ったけどじいちゃん、ばあちゃんは逃げようとしませんでした。じいちゃんは、家を守り、見届けようとしていたそうです。母さんも私も弟も何度も「逃げて!!」とじいちゃんとはあちゃんに叫びました。土石流が流れてきていました。巻きこまれたら「死ぬかもしれない」そんな考えが頭をよぎりました。私たちの車は、たくさんのドロをはねながら逃げました。じいちゃん達の車も流れてきた物の中を走りました。あちこちがくずれ、次にどこがくずれてもおかしくないような状況でした。道路に土砂が流れこんでいて地域の人で重機やスコップを使って車が通れるくらいのスペースをあけて進んでも、また同じようなことになっていて逃げられず、私たちの地域は孤立しました。私は救助がくるのかと思っていましたが県内で何か所も救助を求めている人がいて私たちの地域には来ませんでした。夕方なんとか道が通れるようになりました。ひなんしたいとこの家でねころぶと不思議な気持ちになりました。あのたった数分間の出来事がとても長く思え、「なんとかあった」と安心する自分と、「まだ何かあるかもしれない」とせかす自分がいて気持ちがはっきりしませんでした。

「大変だね」私が言った言葉に何も返してくれないくらい気持ちがしずんでいたじいちゃん家の復興作業は危険で私は手伝えませんでした。弟たちはじいちゃん家が怖くなってじいちゃん家に行けなくなりました。ボランティアのみなさんのおかげで家が復興したじいちゃんとはあちゃんは口を開いてくれるようになりました。お母さんはそんな人を助ける仕事を始めました。

私は、今も災害の話を知りたくなかったり災害のことを思うと恐怖からとりはだが立ちます。私はこの災害の時、1度も涙がでませんでした。理由は自分でも分かりません。だけど自分の中で何か強く思うことがあるのかなと思っています。

私がこの災害で学んだことは、命を守ることです。自分と大切な人の命を守ることとは簡単ではなく、考えていた通りにはいきません。いつだれが被災者になるかも分かりません。私は、自分のできることを考えて自分の命は自分で守れるようになりたいと思います。